

明治天皇の東幸

郷土史家 西羽 晃

慶応4（1868）年7月17日に江戸は東京と改められ、天皇は東京へ行幸されることになった。8月29日に道中見分のため、五辻大弼と戸田大和守が京都を出発した。9月8日には明治と改元されたが、同月20日に天皇は京都を出発して、東海道を東京へ向かわれた。

「三種の神器」の一つである「神鏡」は天皇と共に移動するが、それを収める仮の内侍所が各宿場に設けられた。桑名では春日神社拝殿が当てられた。春日神社では境内の掃除は勿論、畳替え、瑞垣の繕い、石灯籠は添え木を倒れないようにし、楼門や正殿の破風瓦が落ちないように菰で包んだ。さらに銅鳥居や石灯籠の姓名の部分は紙を貼って隠した。また拝殿に架かっていた「三崎大明神」と「春日大明神」の額も取りはずした。9月23日には先発隊の係員に拝殿の鍵は渡され、以後は神官たちは勿論、掃除人も立ち入ることは出来なくなった。桑名藩の武士や町人も23日から外出を禁じられた。鳳輦（天皇が乗る蓮台）を安置する仮小屋が北大手門前に設けられた。

天皇は9月25日に四日市黒川本陣を出発し、富田の広瀬五郎兵衛方、小向の伊藤伝八郎方にて休憩し、午後2時ころに桑名の本陣・大塚与六郎方に到着し、昼食。その夜は同所に宿泊した。

大塚本陣は現在の船津屋の場所だが、安政の大地震で傷んでいたらしく、急いで寝室・厠・湯殿を揖斐川に張り出して新築している。この日に桑名での昼食は2082人、泊まったのは2071人であり、桑名の宿場町は人で溢れたことだろう。天皇一人のための一行は前後1ヵ月ほどの間に桑名で2750人が昼食し、

2832 人、馬 36 匹が宿泊している。

26 日朝、天皇は名古屋藩提供の「白鳥丸」で桑名を出航し、佐屋へ向かわれたが、川底が浅くて、途中の焼田に上陸し、そこから佐屋を経由して熱田まで陸路となった。現在の弥富市五之三町川平には「明治天皇焼田港御着船所跡」の碑が立っている。碑文によれば俄かに 4000 人を動員して、川底をさらえたようである。碑の立っている場所が現在は内陸になっているが、当時は佐屋川に面していた。

26 日昼に佐屋宿での昼食は 1502 人、馬 30 匹であり、同行者すべてが佐屋へ渡ったわけではなく、「七里の渡し」で直接に熱田宿へ渡った人馬も居た。その人たちには昼食弁当が渡された。荷物は主として「七里の渡し」で送られた。桑名で提供した人足は全部で 21 人である。他の宿場は 4900 人程が出されているのに、極端に少ないのは、船が利用されたので、駕籠かきや人力で運ぶ必要がなかったからであろう。



六郷川を渡る天皇の行列（『御東幸御用記録第一巻』より）

川に船を並べて、その上に板を並べて仮の橋とした

26 日に天皇が発たれた後も、再び京都へ戻られるまでは、春日神社の拝殿は封印された。なお御親恤金として、90 歳以上の人に 1 人に付き金 5 分づつ、80 歳台に金 3 分づつ、70 歳台に金 2 分づつ、親孝行などの人にも与えられた。